



## 『職場体験』を受け入れて

小原 比呂志

屋久島高校は、夏の行事として『職場体験』を行っている。学校が島内の事業者を受け入れを依頼し、生徒は希望する職場で3日間ほど地域の仕事を体験するという、なかなか地に足の着いたカリキュラムである。屋久島は離島とはいえ1万4000の人口を擁しており、それなりにたくさんの職場がある。輝かしい夏の朝日のなか、あちこちで初々しく働いている子供たちの姿は、夏休み前の風物詩として、毎年楽しみなものだった。そして今年、わが YNAC は創立11年目にして、ついに屋久島の『職場体験』を受け入れたのである！

やってきた2人の元気娘は、明るくハキハキしてよく働いた。屋久島の子だから海でも川でも動き慣れていて、シットオン・トップ・カヤックで海に乗り出しても、動じることなどない。そしてなによりも訪問客を迎えるための、親しみのあるホスピタリティを心得ていた。研修におつきあいいただいたお客さんからの評判もよく、屋久

島の未来の観光産業は、この世代が担ってゆくのだな、と感じることができた。

3日目の夕方、ヤクスギランドのツアーから帰ってきた2人は、担当だったフジムラと一緒にその日の解説の中身について、大いに盛り上がっていた。それとなく聞いていると、普段競い合って歩いただけだった森の道に、息を呑む美しさや、深い意味が隠されていたこと、楽しみながら学んだり写真をとったりして、じっくり歩いたことがとても新鮮だったらしい。屋久島で暮らしていれば、日頃からいろいろな自然の姿を見たり食べたりして経験を積んでいる。それらを科学的に裏づけたり、確認したりできたことに、知的にエキサイトしているのだ。フジムラも嬉しそうに付き合っている。そう、知的なまなざしが大切。そして常に新鮮な喜びを共有してゆく。それがこれからの自然体験観光の鍵だと、僕らも信じている。

「この国の中で、これから屋久島が果たしてゆくべき役割とはどういうものか。」

かつて屋久島観光協会の要職にあった方の、挨拶の中にあつたこの言葉を思い出す。

本土の自然が荒廃し、さまざまな社会不安が深刻化しているなかで、是非もなく屋久島への期待は高まってきている。それに媚びるのではなく、思い上がるのでもなく、地域の精神と産業とを新たに作り上げてゆく作業、それは、なによりも地域の全体像を深く理解することから始まる。そのためには、屋久島のさまざまな姿を柔軟に解き明かし、共有してゆく能力を持つ、若い力の育成が重要な課題になるだろう。

そう以前から思っはいたのだが、ひよっとするとその若い力が、もう芽生え初めているのかもしれない。2人の元気娘は、今回の職場体験を通じてエコツアーガイドという仕事が容易なものではない、ということも痛感したようだった。そのとおり。なにごと基礎が肝心。大学で(なくてもいいけど)よく勉強し、体を鍛えて、願わくばもういちど YNAC の門を叩いてください。われわれも、かれらが誇りを持って働ける業界を作るため、努力を続けてゆこう。

# マウンテンバイク 安房 コース

藤村 早苗

2004年5月、今年もこの島は見事な新緑に覆われ、新しい森が出来上がった。この春の空気を感じながら、生まれ変わった森をマウンテンバイク(以下 MTB)で駆け抜ける瞬間が、私の春一番の楽しみである。そして、その後訪れる暑い夏には、照り輝く太陽の下、森は深い濃緑のベールに覆われ、照葉樹はより一層輝きを増す。蝉が鳴き、野いちごが実をつけ、川のせせらぎが恋しい季節。そんな屋久島の夏の森を楽しむ手段の一つとして、YNAC がお勧めするのは「MTB・安房ルート」。里を周りながら島の人の生活を感じつつ、少し道をそれるならばそこには川越えあり、ダウンヒルあり、と MTB の醍醐味も味わえる充実コース。今回はこの MTB 満喫コースを是非、皆様に紹介したい。

## 1) 安房港

屋久島の東、種子島との海峡から南に続く海は絶好のトビウオの漁場。かつては5月に

産卵期を迎えるトビウオは海藻に卵を海にくる。そこを狙って「時季トビ漁」を行っていたが、昭和50年代後半より屋久島沿岸から海藻が次第に姿を消し、その為トビウオが来なくなりました。そこで今は、沖合いで2隻の船が脛のついたロープを張り、そのロープの中央へトビウオを追い込む方法で漁をしている。そして、この安房は日本一のトビウオの漁獲量を誇る。トビウオの港・安房港より「MTB・安房ルート」はスタートする。

## 2) 船行川

安房の海を眺めながら、里の家々を結ぶ小さな道を走る。その道も途中から砂利道へと姿を変え、暖竹(ダチク)に覆われた趣きある道へと変化する。砂利の感覚を楽しみながら暖竹の間をすり抜けると突然、パツと目の前が開け、大きな川が行く手を阻む。この川が「船行川」、通称「フネゴンタン」。なんともかわいらしい響きだが、この「フネゴン」とは船行村の転訛。そして「タン」とは谷を意味す

る。MTBで出てきたこの場所は川の河口で、潮の飛沫も感じるくらい海に近い場所。特にこの辺りのことを「ハマスピカワ」とも言い、「浜遊びの川」という意味があるそうだ。というわけで、ここでは思いっきり MTB で川を楽しもう！ 砂利道で MTB に勢いをつけたなら、ここは水飛沫を浴びて、一気に向こう岸まで走りきれ！

## 3) 船行神社

川岸から道は船行の集落へ続いていく。「昔、船を作っているときに大雪が降り、積雪の重さで船が壊れた」というところから、「ふなゆき(船雪→船行)」になったと伝えられているこの集落は、冬の寒さが特に厳しい。今年初めの厳しい寒波の折、この島の里でもあられが激しく降った。普段から冬の供えを持たない私の乗った車が、積もったあられでスリップしたのも丁度この辺りであった。そんな厳しい気候の集落の中にひっそりと、しかし風情を感じる神社がある。「船行神社」だ。鳥居をくぐり、境内に入ると胸高周囲3mを越えるような立派な杉が立ち並ぶ。集落の中にも関わらずとても静かで、荘厳とした空気が漂っている。しかし、杉の木立の洞に子供たちの遊び道具が隠されているのを見ると、この神社が集落の生活の一つであることを実感する。この静かな空間で一休み。

## 4) お茶の道

船行集落を抜けて農道を走る。この道の周りには茶畑が広がり、深緑のドームが並ぶ。3月下旬より「栗田早生」の一番茶から茶摘が始まり、4月中旬に最盛期を迎え4番茶にあたる11月の秋冬茶(しゅうとうちゃ)を最後にチャノキは休眠期に入る。屋久島が暖かい気候ゆえに長い期間の茶摘が可能なのだ。

## 5) 松峰大橋

茶畑を抜け農道を走り続けると、突然ぱつと視界が開け、照葉樹の葉の輝きが目に飛び込んでくる。「松峰大橋」だ。この橋は屋久島最大の川・安房川に掛かり、高さは75m。足のすくむ高さだが、青く澄んだ安房川の美しさに惹かれて覗いてしまう。夏期はカヌーも多く、色とりどりの艇が川に彩りを添えてくれる。だが、川的美しさに加え夏の強い日差



船行川へ突っ込め！



爽快ダウンヒル スタート！

しに照り輝く照葉樹林が本当に見事である。

## 6) お屋ご飯の沢・タキノカワ

松峰大橋を過ぎ、農道を南へ。少し行った先から森の中へ一歩入ると落葉が厚く積もったフワフワの道が続く。タイヤのブロックをうまくかませながら、滑らないように木の根を避けて走ろう。木々に阻まれ行き止まりになったら、そこからお屋ご飯を持って歩こう。その先には小さな沢、通称「タキノカワ」がある。この川も照葉樹に覆われ、木漏れ日の緑が美しい。手ごろな岩の上で一休みすると涼しい風が通り抜けてゆく。贅沢なシチュエーションでランチタイム。

## 7) 究極の心臓破り

農道は屋久島公園安房線へとつながり、久しぶりに2車線の道を走る。しかし、ここから安房コース最大の試練。「屋久杉自然館」へ続く登りを地味に上る、上る、そしてさらに上る！ ざっと高低差は130mといったところか。「屋久杉自然館」を通り過ぎ、そろそろくたびれかけた標高220m辺りより、山手にある小さな林道へ入る。すると、駄目押しのコンクリート舗装の激坂が私たちを迎えてくれる。ここからさらに80m、ここは一気に上りきる！ 上りを征する者はMTBを征す、これもMTBの楽しみの一つ。しかし、上り坂とは得てしてバランスを崩しやすいもの。ここで転ぶともれなくホウロクイチゴのトゲの洗礼を受けるのでくれぐれも気をつけて。

## 8) 爽快ダウンヒル

安房コース最大の試練を征した者だけに許されたお楽しみ、それがこの先に待っている「爽快ダウンヒル」。一気に噴出した汗を拭きつつ、ヘルメットとグローブをきっちりはめる。サドルを低めにセッティングしたら息を整え、覚悟が決まったら READY GO! 本格的なダートコース、ここは一気に駆け抜けろ！

ここはただの砂利道が続くのではなく、ところによってホルンフェルス(熱変成岩)が混ざる。よって前日に雨が降ったならば大変滑りやすく、難度もアップする。こんな日は思い切って体も MTB もドロコになって楽しもう！ 植林した杉の森を抜け、青い海をちらりと見たなら、さらに下りは続く。去年開通した「春平線(春牧集落と平野集落を結ぶ道)」へたどり着いたならば、久々のアスファルトにホッと一息。しかし、その先ダートはまだ続く。砂利道ではアスファルトと違って MTB が跳ねる。その振動に始めは驚くが、そのうち体が馴染んでくる。するとカーブでコースを選んだり、ちょっとした段差へも挑戦したくなってくる。妙な興奮がスピードと共に加速していき、それが最高潮に達した時、目の前に突然、沢が現れる。ここは失速せず、そのまま突っ込め！ 水飛沫にまみれて、クールダウンだ！！

## 9) 平野集落

道は砂利道からアスファルトへと姿を変え、林道から農道、そして県道へつながってゆく。平野方面を目指して走り、屋久島の銘焼酎「三岳」の工場まで来たならば県道を渡り、再び農道へ入ろう。ここは県道より一本海辺の道。この辺りにも茶畑が広がり、人家が点在する。島の静かな暮らしを少し感じられる瞬間だ。また、集落を流れる小さな川には古いコンクリートの橋が架かる。苔に覆われ、周りの森にすっかり溶け込んでいる。その川のほとりにはフトモモの木があり、花期には大きな打ち上げ花火の

ような華やかな花が咲き誇る。今年も満開だったので、実のなる季節が楽しめた。

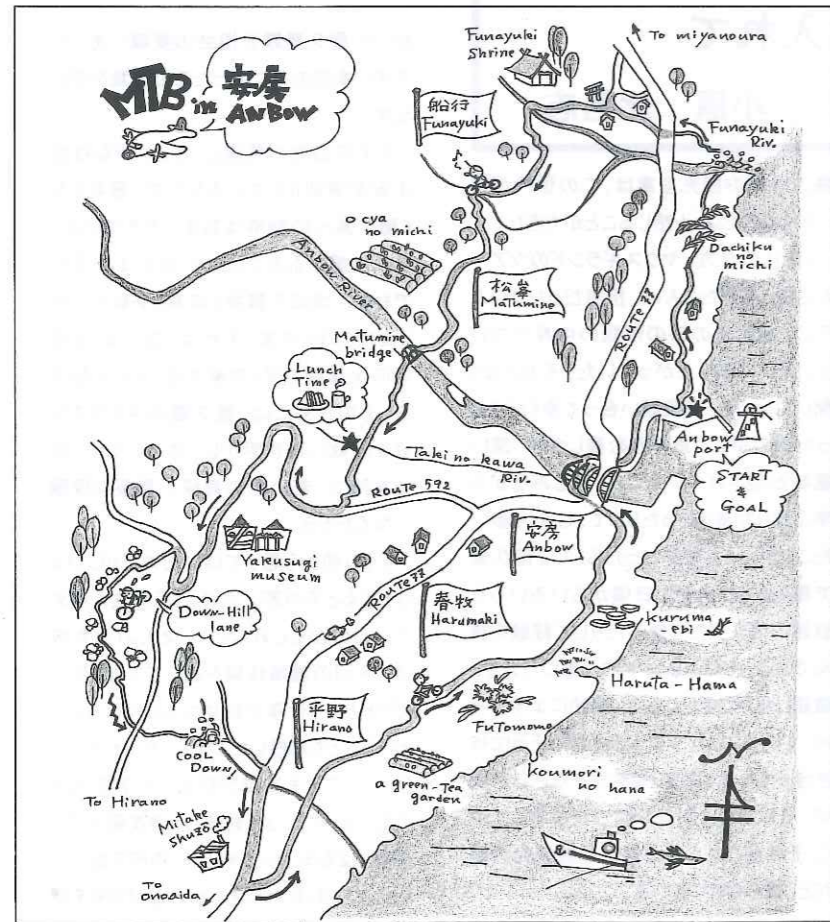
## 10) 春田浜海岸

安房集落の東の海岸、「コウモリノ鼻」に続く海岸線は、ちょっと変わった石で覆われている。まるでコンクリートを粗雑に塗り固めたような感じで、大小複雑な突起が密に出る。これは今より約5000年ほど昔、屋久島の浅い海で成長した珊瑚によって出来た石灰岩地形。つまり、ここはかつてのサンゴ礁。しかし、その後の気温の低下により、海水面が下がった為に海岸へと露出したのである。こんな地形を「離水サンゴ礁」と呼ぶ。大小の突起の間からイソマツやイソフサギといった海岸沿いの植物が顔を出し、コウライシバの草原に海の風が渡ってくる。遊び疲れた体に海の風はとても優しい。あとは、安房の集落に戻り港に帰るだけ。すっかり汚れた MTB を眺めながら、今日一日の自分の勇姿を思い出すとしようか。

〈参考文献〉

- ・屋久町郷土史 第3巻 村落誌下
- ・榎恵命堂 <http://keimeido.co.jp>

タキノカワで心も身体も一休み



# \*\*\* 屋久島 うぞうむぞう \*\*\*

高橋 宏美 ☆ 岡田 愛

## 星砂の生活☆☆☆

### 星砂は生きています！

海辺の土産物屋さんでよく目にする星砂が詰まった小さなビン。そのビンには「愛と夢を運ぶ星の砂」などと書かれており、なんともロマンチックです。ところでこの星砂、実は生き物だということをあなたはご存知でしたか？

ホシズナ *Baculogypsina sphaerulata* は、原生動物有孔虫類。アメーバと親戚です。その星のような外観から種の名前も「ホシズナ」。英語ではStar Sandと呼ばれています(左下写真)。大きさは約 2mm とちっちゃいけれど、肉眼でも見えるんですよ。

### ホシズナのすみか

ホシズナは海の中で暮らしています。その分布は奄美以南とされています(\*1)。屋久島にも住んでいます。特に、サンゴ礁の波当たりが強く、干潮時には干出し、さらに海藻などがわさわさと繁茂するような混み入った空間がお好みようです。屋久島では水深膝下位~5m位の範囲で、ミル(緑色のうどんのような海藻)などの海藻が繁った場所を探すとその根本に多くがくっついて生活しています。



海藻をすみかにしている生きているホシズナ

### ホシズナの生活

ホシズナには他の有孔虫類もつような「口」がありません。その代わりに棘の先端が「口」の役割を担っています。その「口」からは仮足と呼ばれるネバネバした触手を出したり入れたりして、えさをとったり、排泄したり、物にしがみついたりして暮らしています。

とまあ自活できる体つきではありますが、食生活の大部分は体に住まわせている「珪藻」という藻類の同居人に排泄物を与え、見返りに光合成エネルギーを分けて頂いているようです。このライフスタイルはサンゴと褐虫藻との共生関係と同様、貧栄養環境下でも効率良くエネルギーをやりとりできる画期的な関係といえるでしょう。しかしながら、時としてホシズナは同居人の珪藻を食べてしまうらしいのです。なんということでしょう！ロマンチックな印象とは裏腹に、リアリストとしての一面も？！

### ホシズナの繁殖

ホシズナは無性生殖を行うのが確認されているのですが(Kuwano 1956 年)、有性生殖もしているらしいのです。有性生殖は白色の配偶子の塊を水中に放出するそうですが、いつどのように行われているか

はまだ謎に包まれています。ぜひ水中でその瞬間を目撃してみたいなあ！一方、無性生殖は主に初夏、ブクブクと泡状の保育室を作り、その一つ一つの部屋がはじけると、中からホシズナの幼い分身たちがポンポンと出てくるそうです(右下図)。1 個体の親から生まれたクローン個体の数は 800 個体前後！幼生クローン個体の大きさは約 100 μm。

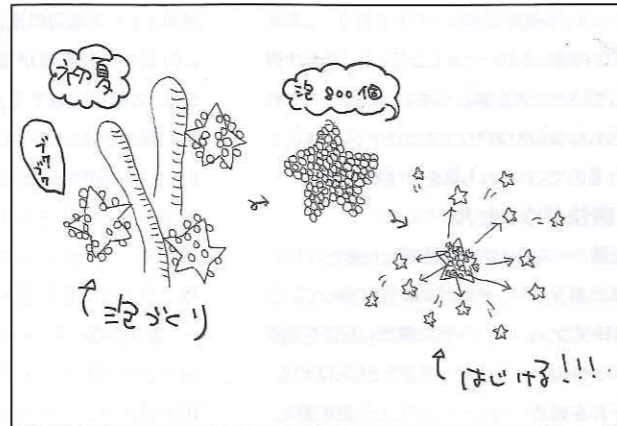
### ホシズナのサンゴ礁における役割

ホシズナの殻である星の形をした体はサンゴと同様、炭酸カルシウムでできています。ホシズナの寿命は 1.5 年と推定されていますが、その死後は星型の石灰質の殻が残ります。それが波によって海岸に運ばれ砂浜をつくるのです。また、時には死んだサンゴの隙間を埋めて、サンゴ礁石灰岩の穴埋め役として石灰岩を緻密にするなどと、その死後も様々な動物が暮らせる居住空間を作る上で重要な役割を担っています。

ということで、私達が砂浜や土産物屋で目にしていた「ホシズナ」は、小さいけれどもなかなかやり手の生き物であったのです！海に行くチャンスがあればぜひ彼らの生の姿を覗いて見てね！(ひろみ)

### 参考文献

\*1 サンゴ礁のいきもの 山と溪谷社



星砂☆無性生殖予想図

## 伊達さかな\*テング

### 再会

世の中にはおもしろい色や形の生き物がたくさんいます。私が学生時代にはまっていたのはお魚の「色恋沙汰」。魚の生活をつぶさに記録し、一つ一つの行動の意味をお節にも考えることが私の研究課題でした。「色恋沙汰」は行動だけでなくその魚の色や形も進化させていくといいます。その研究対象が、今から 7 年前に屋久島のお隣、口永良島島で出会った「テングヘビギンポ」(いつもテングと呼んでいた)と言うわずか 4 cm ほどのお魚でした。オスだけが、それはそれは美しい変化自在の体色に加え、上唇の先端がツノのように伸びている、まさに「伊達さかな」と呼ぶにふさわしい魚です(写真右:メス、左:オス)。

屋久島に来て 5 年目、ようやく仕事以外のことに時間を費やす余裕が出てきたので、今年は暇を見ては屋久島の海で早朝スノーケリングをするようになりました。そんなある日、住んでいる団地の目の前の海で、すっかりご無沙汰していたテングヘビギンポに再会したのです。

### テングヘビギンポとは？

ヘビギンポ科の魚、テングヘビギンポの学名は *Helcogramma rhinoceros* (ヘルコグラマ リノセロス)。属名のヘルコグラマはクロマスク属、リノセロスはラテン語で「サイ」を表します。クロマスクは黒い顔ではなく黒い下顎。それと、オスの「サイ」の角のように伸びた上唇の皮弁を学名で表現しています。和名ではその皮弁をテングの鼻に例えています。さらにオスはメスとつがう時間の前後だけ瞬時に婚姻色という普段(半透明茶色)とは異なる鮮やかな体色(朱色)を帯びます。この時同時に下顎が真っ黒になるヘビギンポの仲間。つまりクロマスク属の一種に含められています。

テングヘビギンポは日の出と共に恋をします。小さいし、普段は周りの茶色に同化してどこにいるのかとも見つけにくい魚です。派手な婚姻色になる時間が

見つかるチャンス。やっぱり屋久島でも、日が昇って薄ら明るい海の中でオスは瞬時に色を変え、やってくるメスに向かって美しい朱色で一糸懸命求愛ダンスを踊っていました。

### 腹が減っては戦ができません！

オスは年頃になると、5 月頃岩の壁面に産卵床を確保し、そこへやって来る周辺に住むメスとランダムにつながります。オスにとっては何匹のメスとつがうことができるかが繁殖成功率(自分の子孫をいかに多く残すか)を上げる最初のステップなので、「僕のところへおいでよ！」と飾り、踊ることがまず重要です。さらに、産卵床に産み落とされた卵はオスの手で孵化まで丁寧に保護されますから、この子供たちをどれだけ誕生させられるかが、親オスの最終的な成果となるのです。卵を保護している間はその仕事に専念せねばならず、食うものも食わないオスはほとんど成長しません。でも、腹が減っては戦もできず…倒れてしまっただけで身もフタもないわけで、体調管理にも気を使わねばなりません。オスが卵を孵化まで保護する魚は、お腹がすいてどうしようもない時、守っている卵の一部を拝借して飢えをしのぐことは、これまで色々な魚で紹介されています。卵は高カロリーで手っ取り早い栄養源です。テングも案の定、解剖してみると縄張りオスの胃の中から保護中の卵らしき卵が出てきたのです。ところが、調査を進めていくうちに、メスの行動にも不審な点がありました。メスもだまって自分の卵をオスにくれてやっているわけではなかったのです。

### 目には目を、歯に歯を！

これまででは、オスとメスの形態に色や形、大きさなどで明らかな違いがある場合、「より美しい色のオスが病気に強い」など、その形態は一般にメスが優れた遺伝子を持つオスを見極める基準になると考えられてきました。それではその「形態」に大差がなければ、次にメスはオスの何を見るのか？その答えとして、メス

たちの行動から、テングヘビギンポのメスは卵をゆだねるオスの「産卵床の状況」(卵の量や発生段階)を見て、つがう相手を決めている可能性が見えてきたのです。

メスは、孵化寸前の卵をたくさん抱えているオスより、生みたての卵を多く抱えるオスを好んだのです。お腹がすいたオスがたくさんある卵のうちどれを先に食べるのかを考えたら、労力を費やした巣立ち真近の卵より、やっぱり生みたての卵を食べるでしょう。巣立ち真近の卵のそばに新たに産んでしまったら、「こっちは食べて」と言っているようなものです。そんな目には目を、歯に歯を？とも言いましようか、オスの行動(卵捕食)に対するメスの行動の進化を小さな魚の世界に見ることができたのです。

屋久島のテングヘビギンポも、こんな「色恋沙汰」を繰り返しているのかと思うとワクワクします。魚は早朝や夕方に繁殖行動を行うものが多く、よく見るとそれぞれの魚がおもしろい動きをしています。屋久島の海辺で3点セット片手にうろついている女がいたら、是非声をかけてみてください。見た目の美しさの奥にある、お魚の妙をお話できるかもしれません。(オカダアイ)



テングのペア♡産卵中



YNAC第4期研修生  
つれづれエッセイ

花山歩道にて



佐藤 崇之  
Sakou Takayuki

2年前のことである。『屋久島サプレんジャーアルバイト募集』。当時僕が通っていた東京の渋谷にある東京環境工科専門学校に掲示板にそんなアルバイト募集の紙が張られていた。サプレんジャーとは環境省の国立公園管理官(通称レンジャー)の補佐的業務をする者のことである。アルバイト料は屋久島への往復の交通費にプラスα位のものである。僕はその夏、割のいいアルバイトでもして一人暮らしをしようと目論んでいた。何しろ僕の住んでいた埼玉の秩父から学校のある渋谷までは片道3時間もかかるのである。屋久島でアルバイトをしてもお金なんて貯まらない。しかし、ある日のこ

と、突然屋久島に行きたくなってしまった。理由はわからない。気がついたら既に申し込んでいた。運良く採用されその年の夏休みを屋久島で過ごすことになった。

8月初旬、僕を乗せたYS-11は屋久島上空を旋回していた。風が強くなかなか降りられないらしい。空から屋久島の森をちらりと望むと緑がとても濃く、おまけに隙間もないくらいにそれぞれの木々がひしめき合っている。「すごい!」。人家も車もちらほら見えるだけなのに、なんだか賑やかなのである。急に胸がそわそわし始めた。めいっぱい楽しんでやろう! そう心に決めたのを覚えている。

屋久島でのサプレんジャーの仕事は主に国立公園内の整備である。暑い中、屋久島の森を毎日のように歩き回った。すべてが新鮮で、五感刺激されっぱなしだった。太忠岳に行く途中のヤクスギランドではスギ、モミ、ツガの巨樹に目を奪われた。一方、足元には一本の倒れた大木の上からスギの子供達が芽を出している。樹齢が数百年から千年以上といった木々が立ち並ぶ森の中で、その膨

大な時間を歩んできた者とこれから歩いていく者が繋がっているのである。そんな静なる森のダイナミックな移り変わりに感動せずにはいられなかった。アルバイトの契約期間も終わりに近づく頃には、またいつか来ようかと心に決めていた。そして今、YNAC 研修生として屋久島にいる。毎日新たな発見があり感動がある。いったい屋久島はどれだけ僕を楽しませてくれるのだろうか?



長谷川 りえ  
Hasegawa Rie

YNACで研修中の長谷川りえです。大学ではエコロジー政策を専攻していましたが、興味の対象は次第に民俗学へ移っていき、日本の各地域で受け継がれて

きた暮らしや言い伝えを知るのが面白く、その中に含まれる知恵に感心していました。卒業論文では「山の神の祭日」の調査をしました。「山の神の祭日」とは、山仕事を休んで宴会をするという日で、「この日は山の神様が山の木の数を数える日だから山に入ってはいけない」、「山の神様が山の木を植える日だから山に入ってはいけない」、などというように言い伝えられています。実際の理由は分かりませんが、この日だけは山に入らずに宴会をすることが日曜日などない時代の休息日の役割であったり、その地域の伝統食の作り方が受け継がれる場であったりしたのかもしれませんが。行った現地調査では、それほどまい具合に理由付けはできませんでしたが、地元の古老に形を変えてではあるけれども祭が続けられているということや、今でも山の神様の木にお参りしてから山に入っているということや、山で祠を見ると「お参りしておこう」と思ったり、巨木を見ると何となく手を合わせたくなる気持ちが起こりませんか? これも日本人の心の中で受け継がれてきたものなのかもしれません。このような人と自然との関係を見ていくうちに、「自然保護」を叫ぶより日本で受け継がれてきた自然観やその自然観に基づいた暮らし方などを見直したいと思うようになりました。

大学を卒業して3年半程の会社勤めの後、初めて来た屋久島でYNACのツアーに参加。それまでは人の生活の中で自然がどう捉えられてきたかばかりに注目していたのが、自然そのものの見方を教えてもらいました。ガイドの一言で導き出される「ああ、そうなんだ!」という驚きと感心。普段なら、ずっと流して見てしまっていたような物がこんなに面白かったなんて嬉しくなりました。この面白さを人にも伝えたいし、自分自身も自然のことをもっと学びたいと思いました。研修の道りは険しいですが、ひとつひとつ前進していきたいと思っています。よろしくお願いします。



榎村 精一  
Kashimura Seichi

4月からやってきました榎村精一と申します。神戸市で生まれ、愛媛で林学と植物のことを少々学び、材木屋に就職して1年半で退職、トヨタ自動車期間従業員を経て、屋久島のシダに惹かれてやってきました。植物の見分け方を学んで以来、シダの左右対称さが不思議でたまらず、春先のぜんまい巻きの中に葉の細胞が一揃いあると知り、複雑かつ完璧に開いたそれを見たときに感じる美しさは、満開の桜や、たおやかなランを見る以上です。しかしこの感性、今まで誰にも理解されていません。

日本に5つだけ指定された原生自然環境保全地域のひとつ、屋久島の花山原生林では、1984年に388種のシダが確認されています。ここではコケが約400種あると言われ、シダとコケだけで800に近い種があります。さらに花山には樹木・草本が約1200種あり、これらが東西6km、南北3km、わずか1219haのせまい土地にひしめいています。暖流の海に突き出た2000mの山に育ち、黒潮から湧き上がる霧と雨にうたれる巨木は、全身緑色になって屋久島ならではの景観を作ります。巨木が押し広げた圧倒的な空間、そこかしこに着生するコケ・草・シダ・樹木の立体的配置。森の全てが我々の眼と心を楽しませてくれます。人間と動物と植物、屋久島で成り立つ、生き物たちの稀有なシガラミをじっくり現場で考える、これが屋久島の楽しみ方の一つだと思います。

6月の山肌にはマテバシイの花と新緑、森にはツルアジサイの甘い匂いがいっぱい。雨後のコケを見て歩けば、動物

も盛んに歩き回り、木々を渡って晩春の果実や芽吹きを食べています。強い風の吹いた次の日に落ちている古い梢にこつこつとした普段は見られない着生植物探しや大雨の後の崩壊観察など嵐の後の楽しみも屋久島にはたくさんあるようです。まだまだ見たり聞いたり体験したいことがいっぱい。これからのご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。



ナチシダ(*Pteris wollichiana*)のぜんまいが開いてゆく様子。湿った所で群落を作る五角形の大きなシダです。



# ウスリータイガを往く ロシア沿海州を訪ねて 市川 聡



ウスリータイガに覆われるイェラモスキーの滝

2004年5月23日、小雨降る新潟空港を飛び立ったウラチオストクエアの旧ソ連製ツポレフ 154 型機は、機内食をゆっくりと味わう暇もないままに、1時間少して下降をはじめた。ふと窓の外を見ると日本海を覆っていた分厚い雲を抜けた瞬間に、眼下に広大な樹海が広がった。新緑のこの季節、森は落葉広葉樹の黄緑色と針葉樹の濃緑色が強烈なコントラストでモザイクをなし、低く波打つように続く丘陵の上を果てなく埋め尽くすように続いていた。これがトラの棲む森、ウスリータイガだ。

タイガというシベリアの果てしなく続く針葉樹林(シベリアタイガ)を思い浮かべる方が多いと思うが、ウスリータイガはこれとは異なり、モンゴリナラ、イタヤカエデなどの落葉広葉樹とチョウセンゴヨウ、エゾマツなどの針葉樹が織りなす針広混交林で、その相観は北海道の森とそっくりである。そこに

トラをはじめとし、ヒョウ、オオカミ、オオヤマネコ、ヒグマ、ツキノワグマ、ヘラジカ、アカシカ、シカ、ノロジカ、ジャコウジカ、カモシカ、イノシシ、タヌキ、キツネなどなど、日本でもおなじみの哺乳動物から絶滅種、動物園でしか見ることができない種類までありとあらゆる野生動物が暮らしている。今回は風カルチャークラブの海外講座として、沿海州ツアーが実現できないか可能性を探るために、沿海州をはじめとして極東ロシアで調査を行い、ロシア事情に詳しい千葉県立中央博物館の昆虫学者、倉西良一さんとともに、沿海州でも特に野生動物が豊富なラゾ自然保護区(以下ラゾ)を訪れた。

ラゾは州都ウラチオストクから西へおよそ250km、緯度的には札幌とほぼ同じで、途中、車窓からの景色は開拓期の北海道、100年前にタイムスリップしたかのような原野と農村地帯が続いていた。保護区の面積

は約 121,000ha と大陸で見れば点のようであるが、実際には屋久島 2 個半ほどもある地域である。沿海州の脊梁をなすシホテアリニ山脈の南端に位置し、中央を南北に 1,000m クラスの山が並び、日本海側と大陸側を分けている。このためより大陸的で夏暑く冬の寒さが厳しい山脈西側と夏涼しく冬は穏やかな日本海側とで気候に違いがある。雪は多くはなく、特に海岸に面した南部の斜面は、通常雪はない。

ラゾの森林は、大きく分けて3つのタイプに分類されている。低地を落葉広葉樹の森が覆い、山腹は針広混交林、山頂部はエゾマツの針葉樹林といった具合だ。このうちタイガと呼ばれるのは針葉樹を含む林分で、山腹の針広混交林がウスリータイガの代表的な景観をなす。

そのウスリータイガを特徴づけるのがチョウセンゴヨウだ。ヤクタネゴヨウの親戚筋に当たる五葉松で、松ぼっくりは 20cm ほどの長さになる。この実はおいしく、栄養が豊かで、タイガのパンとも言われている。大量にあるモンゴリナラのドングリとチョウセンゴヨウの実が豊かな動物相を養い、世界的にも貴重なトラを頂点とする生態系が維持されているようだ。

チョウセンゴヨウは北海道には自生していない。しかし日本でも八ヶ岳の南西斜面にはチョウセンゴヨウ、ミズナラ、カラマツが混生する森、まさにタイガが残されているそうである。かつて氷河期には日本列島がタイガに覆われていたということなのであろう。そういえばサーベルタイガーがかつては日本にも棲んでいたのである。その後の温暖化、湿潤化で日本のタイガは消滅し、八ヶ岳山腹に残るのみとなってしまったが、日本の旧石器時代人がオオツノシカやナウマンゾウを追い、サーベルタイガーと戦っていた時代の森が、豊かな動物相とともに沿海州にはいまだ広く残されているのである。

今回はラゾの西外に隣接するイェラモスキーの滝へのトレッキングで、タイガの片鱗に触れることができた。川を何度も横切りながら沢沿いに 4km ほど登っていくトレッキングルートで、川沿いにはドロノキをはじめとするヤナギ科の原木が目立つ。川の中流あたりからいよいよ直径 1m ほどもあるチョウセンゴヨウやエゾマツが多くなり、黒々とした森となった。

案内してくれたラゾのガイドのユーラさんに「これがタイガか?」と聞くと、「ダァ、タイガ」との返事。100 年前にデルス・ウザーラがアルセーニエフとともに探検したウスリータイガについて足を踏み入れることができたのである。

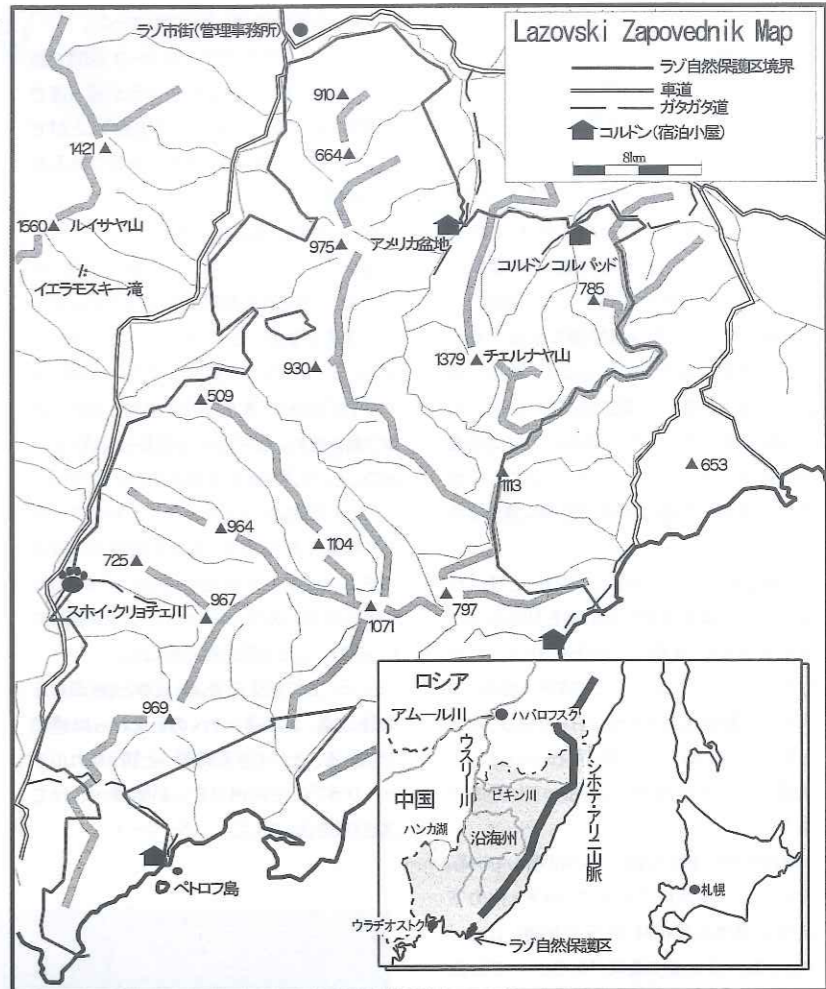
タイガに囲まれた落差 17m のイェラモスキーの滝は、小さいが水量が豊かで美しい滝である。滝壺の周りにはヤチブキが黄色い花を付けていた。この滝の上は、ルイサヤ山の山裾にあたり、山頂までガレ場となっている。ルイサヤとは「毛がない=ハゲ山」という意味で、おかげで少し登ると川沿いのタイガを見下ろすことができる絶好の展望場所となっている。新緑の黄緑に黒々とした針葉樹林がパッチを作る様は、まさに飛行機からテラリと垣間見られたタイガの姿である。ここから遠くラゾの山並を眺めると山の上を黒々としたタイガが覆っているように見受けられる。あそこにはもっと巨木の並ぶタイガがあるはずである。

しかし残念ながら今回は、直前に大雨が降ったということもあり、保護区の奥を訪れることはできなかった。実はロシアは非常に道路事情が悪いのである。特に保護区内は、まるで密猟者が入りにくいように、あえて道路を荒らしているかのようで、普通に川をいくつも横切って進まなければならない。従って少し増水すると普通の 4WD の乗用車では到底太刀打ちできないのである。しかし川の手前で呆然としていると、後から来た巨大トラックが何事もないかのように川を渡っていったのには驚かされた。とにかくそれなりの準備がないとロシアでは何もできないということだ。

ところで 10 年ほど前まではラゾのような自然保護区は、自然環境の保全や研究を目的として設立されたもので、一般人が観光目的に立ち入ることはできなかった。現在は外国人観光客にも開放されており、保護区内での様々な活動に対する価格がラゾのホームページにも明示されている。この価格は外国人とロシア人で大きく異なっている。例えば 1 日保護区内を歩くのに、外国人観光客は 15US\$ を支払わなければならないが、ロシア人は 25 ルーブル(約 1US\$)と 15 分の 1 である。このことから外国人観光客への開放の目的が伺い知れる。

ラゾの管理事務所のセルゲイ次長に尋ねたところ、現在観光客が主に利用できるのは 5カ所で、このうち 4カ所はコルドンと呼ばれる宿泊用の小屋が用意されている。このうち 3カ所のコルドンにはバーニャが用意されている。バーニャとはロシア式のサウナのことで、アツアツのサウナの中で、お湯につけたナラやシラカバの葉付きの枝で、バシバシと身体を叩くと、実に良い香りがサウナ室の中に漂い、心地よい汗がかけられる。

さて、今回入ることのできたラゾの周辺部はモンゴリナラ、ハルニレ、シナノキ、イタヤカエデ、ヤチダモなどの明るい落葉広葉樹



ササのない明るい林床は、季節の花で彩られる。

に覆われている。本来は低地部でもタイガに覆われているのが自然な姿らしいのだが、山火事や伐採などの影響で、人の領域に近い場所は 2 次林化して落葉広葉樹林となったところが大部分のようである。特にロシアではキャンプには豪快なたき火がつきもので、人為的な山火事が後を絶たないのだそうだ。山火事が下層を通った森を見たが、林床に育っていたチョウセンゴヨウの若木がこ

とごとく枯れていた。こうして山火事がチョウセンゴヨウを枯らすことによって、落葉広葉樹の森が維持されているのであろう。

沿海州の落葉広葉樹林は林床にササがないのが大きな特徴である。このため明るい新緑の森の中では、ツバメオモト、ユキザサ、オドリコソウ、カラマツソウ、スズラン、エンゴサク等々、春の野草が無数に咲き誇っていた。林床植生の乏しい屋久島の常緑樹林か

# 行ってきました！見てきました！ ニュージーランドエコツアー

鷲尾 紀子

ら来たものにとっては、心が洗われるようなお花畑である。しかし倉西さんによると5月のゴールデンウィーク頃にはエンゴサクの花が絨毯のように一面を覆い尽くし、こんなものではないとのこと。

お花畑に分け行ってみると、足下からホオジロなどの野鳥が次々と飛び立つ。そのあたりを探すとこんもりしたお椀ような巣がみつき、中には卵や雛鳥がいる。野獣ひしめく森の中で、こんな無防備な地面に巣があって大丈夫かと心配になるが、無数に巣がある様子を見ると、数で勝負しているのかとも思う。そもそも日本の野鳥の中には沿海州で子育てをしているものも少なくない。何故に沿海州に大量の野鳥が繁殖に集まるのか？

今回も森を歩いていると、メマトイと呼ばれるハエの仲間がまさに目のあたりにぶんぶん飛び回り、非常にうっとうしかった。しかしかなりうっとうしいこの虫の数も、倉西さんよれば、夏場はこの千倍から1万倍にもなるとのこと。おそらくこの信じられないほどの大量の虫たちが野鳥たちを養っているのだから。

車裡作用に豊かな森に、トラは棲んでいる。今回はラソ南西部スホイ・クリョチェ川の下流部の落葉広葉樹林でトラの足跡に出会った。この川は上流に温泉があるということで、川沿いに道があり、一般に開放されている。実はトラはその道を歩くのである。トラのテリトリーは広大で、雄の場合 160~2000km<sup>2</sup>もあるという。そのなわばりを巡回するのに道はとても歩きやすく効率がよいのである。そもそもトラは森の王者であり、歩きやすい道を堂々と利用するのは、当然といえば当然のことである。

泥の上に残された真新しい足跡は、さっきまで我々が昼食を食べていた場所にまっすぐに向かっている。踏みしめられた草の様子からしても、昨晚ここを通ったとしか思えない。肉球の幅は 10cm くらいであろうか。雌の大きさである。大きな雄では幅が 14cm にもなるという。こんな巨大な手で、猫がネズミをいたぶるように、トラは犬をいたぶるという。殺されるならばと思いに殺された方が幸せだろう。コロコロ転がされる様子は想像しただけで背筋が寒くなる。

道上には足跡の他に、古いシカの食べ跡や糞が落ちていた。バリバリ噛み割られた巨大なシカの大腿骨は、強靱なトラの顎の力を思い知らされる。また古い糞はシカの毛を残すのみとなっていたが、その広がり直径 40cm ほどもあり、その大きさに驚かされた。野生のトラを見てみたいという思いもあって、ここを訪れたが、その痕跡の迫力

に、そんな野心は消し飛んでしまった。

ちなみトラはテリトリーを 2~3 週間で巡回して廻ると言うことなので、トラが通る道で 2 週間も待っていれば、トラに出会うことができるとの話であった。勇気と時間のある方は、挑戦してみたいか？

今回はビザが直前まで取れなかったり、川が増水していたりと、ロシアの旅の手強さを知らされ、限られた時間で充分な下見ができたとは言えなかった。しかしセルゲイさんによるとラソのアムリカ盆地には巨木の織りなすタイガがあり、貴重な原生植物が残るベドロフ島を含め、海岸線の生態系も素晴らしいとのこと、ラソの魅力は尽きないようである。

また今回案内してくれたロシア科学アカデミー極東支部生物学・土壌学研究所のマカルチェンコさん、タマラさんをはじめ多くのロシアの方々とのウオトカやバーニャを通しての交流も、とても魅力的であった。

ということで悠久の昔より日本と続く母なる大陸の森、北海道へ行くのと変わらぬ時間で訪れることができる異国へと誘う風カルチャークラブの沿海州ツアーが開講へむけて大きく動き出しました。ハラショー！

## 参考文献

- Amphibians, Reptiles, Birds and Mammals of the Lazovski Zapovednik. (2002)
- 知られざる極東ロシアの自然(2000)
- 北方植生の生態学(2002)
- ウスリートラを追って(1995)
- シベリア大自然(1995)
- ドングリの森(1991)
- ソ連沿海州で考えたこと(1991)
- ビキン川のほとり(2001)
- デルスウ・ウザーラ(1965)

## ロシア語講座(おまけ)

- Да(ダア)=Yes
- Нет(ニエツト)=No
- Хорошо(ハラショー)=素晴らしい。
- Водка(ウオトカ)=ウオッカ
- Спасибо(スパシーバ)=ありがとう
- Пожалуйста(パジャールスタ)=どうぞ、どういたしまして
- Здравствуй те(ズドラストビーチェ)=こんにちは
- Я люблю вас(ヤア リプリュウ パース)=I love you.



泥の上に残されたトラの足跡。コンパスの直径が約4cm。

## はじめに

屋久島以外の自然を見たくかった。YNAC 以外のエコツアーに興味があった。あられ降る冬、我が家の寒い隙間風から離れたかった。どこか暖かいところへ…。夏、南、森、エコツアー…。ということで、出かけてきました、ニュージーランドへ。今回は、NZ政府観光局の方からの紹介もあり、現地でもエコツアー研修をさせて頂いたハイキング・ニュージーランド社のツアーがどんなものであったかを報告しようと思う。

ハイキング・ニュージーランド社のご好意で、「Nature Safaris」と称される5つのツアーのうち、「EASTERN EPIC」と「WESTCOAST WILDERNESS」と題されたツアーに参加。これらのツアーは10日間かけて、10人乗りほどの車にトレーラーをつないで、移動しながら要所所でトランピング(NZではハイキングのことをトランピングと呼ぶ)をする。フィールドはNZ全土で、各ツアーごとに行くエリアが決まっている。参加した「WESTCOAST WILDERNESS」のツアーは下記のようなった。

## DAY1 木のち / DAY2 木のち

Nelson で集合。ツアー中のルール、マナーの説明があり、車を走らせ Kahurangi National Park へ2days トランピング。南半球にしかないナンキョクブナの森を歩き、キャンプ。皆で乾杯しようと私はこっそりビールを持ってきていたのだが、何と同じようにワインを持ってきた人がいた。楽しそう。

翌日、Mt.Arther(1795m)を目指さずだったが、悪天候のためルート変更して下山。小さな町のはずれにあるキャビンで一泊。川で泳ぎ、南十字星の光る星空を楽しむ。こんなに良い天気なのに、明日の目的地では前線が通過するとガイドのテリが示唆する。

## DAY3 木のち雷雨

天候判断がでる。予定していた Papanoa National Park のトレイルは、川が増水が懸念されるため別トレイルを歩くことにする。車を走らせ、観光名所に立ち寄りながら、Croesus Track へ2days トランピング。雨降る中、木生シダの林をぬけ、広葉樹の森を抜けていく。見たことがない苔があつたりで、ゆっくり足を止めたのだが、雷雨になりだし日が暮れ出した。なんとか明るいうちにと先を急ぐ。雨に濡れて凍えた身には、乾いた Hut(山小屋)が心底ありがたい。ドイツ人、カレン

は、泣きそうなヨロコビの声をあげ、私に抱き着いてきた。大急ぎで薪ストーブに火をおこす。夜半、温かく平和な Hut と対比するかのよう、猛烈な雷とあられが繰り返し降りつづける。

## DAY4 木のち時々

目覚めると、夏にも関わらず雪が積もっていた。相変わらずの天気なので、朝のトランピングは止めにして、Hut でのんびりしてから下山開始。雨降る中の山歩きだと、どうしても皆無口になり早足になる。でも、それはちょっともったいない。だって、雨に濡れる昔の森はそれだけで美しいのだ。だんだんと天気が好転する。思い出したように、森に差し込む日差しに苔が、木々がきらきらと光る。足を止めては、「いやー、あんたたち本当に綺麗だねえ。」とついつい森に話しかけてしまう。下山後、バックパッカーズ・ホステルという安宿に

泊まる。4日目に初めてシャワーを浴びる。さっぱり。

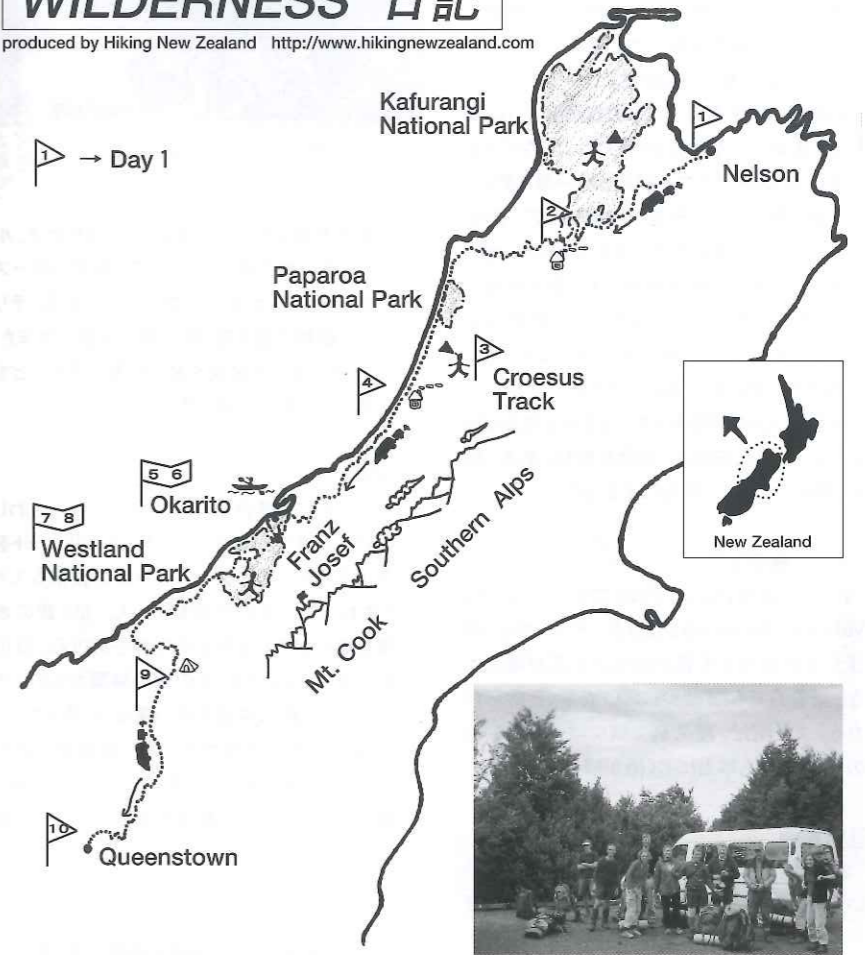
## DAY5 木のち

Franz Josef 氷河へ行く。オプションで氷河ウォークがあったが、だれも参加せず。代わりに氷河を見下ろせるトレイルを歩こうとテリは考案していたのに、悪天候で実行できず。天候に合わせてツアーを進行しなくてはいけないガイドに同情した。結局、歩いて氷河のすぐ下まで近づいてみることにした。風が強い。滝が風にあおられて下には落ちず、上に飛沫をあげている。すげー、と思ったら私の前を歩いてきたカレンまでも突風でちょっと飛んだ。すげー。

午後からは町のんびりする者と、テリと簡単なウォーキングに出かける者とに別れた。この日は Okarito という海辺の小さな集落のキャビンで宿泊する。

## WESTCOAST WILDERNESS 日記

produced by Hiking New Zealand <http://www.hikingnewzealand.com>





Genと一緒に。NZはシマシマタイツがおしゃれなのだ。



雨が森をつくります…

### DAY6 ●時々☁のち\*

オプションで、Okaritoを流れる川の河口でシーカヤックに乗る。黒鳥、サギ等の水鳥を見ながら、枝分かれしていく水路を進み、森へ入り込んでいく。すると、ファンテイル、ベルバード等の陸鳥が姿を見せ、気が付くと我々は鳥のさえずりに飲み込まれていた。声がない。この空間を支配しているのは、決して我々ではなく、鳥たちなのだ。

午後からは休日となるのだが、ついに晴れる。我々はこんな日を待っていたのだ！と一斉に洗濯をし、ツアー開始から一度も乾くことの無い靴を干し、日光浴を楽しんだ。夜は「ハンギ」という焼いた石と食材を地中に埋めて蒸すというNZ先住民マオリ族の料理だった。地球のオープンで料理された野菜はほくほくと、大きな肉の塊は手でぼろぼろとほぐれるほどに柔らかく、おいしかった。

浜辺でハンギ料理をうまいまいとほおばりながら、焚き火を囲み、お酒を飲む。ああ、幸せ。晴れてくれて、本当によかった。

### DAY7 ●のち☁

Westland National Parkの中のCopland Valleyへ3daysトランピング。テリーから、再び雨が崩れる予報が出ていて沢が増水すると困るので今日は少し急いで歩く指示がでる。また雨だ。屋久島で雨には慣れているのだが、ここも本当によく雨が降る。

### DAY8 ●

2泊3日だと、丸一日を山で過ごせるのがいい。遅い朝食の後、ランチを持って滴まで日帰りトランピングに出かけた。氷河が顔をだす



ロックシェルター(岩屋)でキャンプ  
これだけで楽しい!

山並みを見ながら、U字の広い谷を歩き、小さな沢をつめて登っていく。歩く時間もペースも昨日とうってかわってのんびりである。テリーから植物の話も聞いた。遅い午後にはまた、山小屋に戻って温泉を楽しむ者、ぼーっとする者と思いつきに過ごす。

### DAY9 ●

トランピング最終日は、フィナーレにふさわしくスカッと青空が広がった。登りと同じルートを下山するのだが、天気により森の表情も大きく変わっているのが新鮮だった。歩く皆の表情も穏やかだ。足を止めて顔をあげる。目の前にモスフォレスト、その森の隙間からのこぎりのような鋭い稜線を持つ雪山が見えた。この国の自然の多様性を一部、垣間見た気がした。下山後、湖に立ち寄り5日分の汗を流し、最終キャンプ地へ。最後の夜ということで、皆夜半まで飲んだくれた。

### DAY10 ●

ツアー車両、ツアー道具を掃除する。そして、



どうだ!このコケ!!

湖に立ち寄りながら最終ポイント・クイーンズタウンへ

### 旅を終えて…

ハイキングニュージーランドツアーの最大の特徴は、10日間という日程で、ナンキョクブナ林、針葉樹林、モスフォレスト、氷河地形といった多様なNZの自然を効率よく楽しめることだ。NZの自然を目一杯見たい。でも、どうすれば?という観光客の要望をバッチリとカバーしているのである。しかも、行き先は人気の高いトレイルではないが、とってもいい所で静かに自然を楽しめます、という所だ。この辺りはまるでYNACのようだ。そして、一つのトレイルを終えて次のトレイルポイントに行くまでの間に、オプションとしてシーカヤックにのったり、はたまた息抜きとしてビーチでのんびりと焚き火を囲んだりするのだ。ツアー展開にメリハリがきている。

加えて今回のツアーで非常に興味深かったのが、「世界各国の人々との出会い」であった。実に様々なバックグラウンドや個性をもった



Welcome Flat Hat. 日本語に訳すと「ようこそ平の山小屋へ」良い名前だ!



川はザブザブと歩くもの。靴は一度も乾きません。



足を止め、振りかえると…ブラボー!!

人々が集まる。ツアー中、荷物の運搬はもちろん食事まで分担する。まさに寝食を共にしていくわけだから、だんだんと皆遠慮がなくなる。これがツアーを展開していく。共有語はもちろん英語だが、これはあまり問題ではないと感じた。なぜなら、英語に自信がないのは、日本人だけではないからだ。いろいろな国と隣接しているからといって、ヨーロッパ人が皆英語マスターとは限らない。大切なのは、きちんとコミュニケーションをとろうとする気持ちなのだ。T ボーンステーキとタバコとギャンブルが世界一似合いそうな強面のアイルランド人、ラリーは、実はとても繊細でやさしい人だった。お酒を飲まないはずの彼が、最後の夜にワインを飲んでた。「あれ?」と言う私にウインクして、「お酒はもう何年も前にやめたんだ…。でも、特別な日だけ飲むことにしている。」と静かに言ったのを今でもよく覚えている。世界一周旅行中のベルギー人、クリスからは、「ノリコに、この話はしたかな? マダガスカルを旅している時なんだが…。」と、彼が見てきた世界の自然の話や沢山聞かせてもらった。中にはちよびり困ったこともある。オーストラリア人、バーバラは19歳という若さで参加。あるランチの時、ベジタリアンの彼女はサラミを切る40歳のラリーに対して、「Excuse me、この中にはベジタリアンもいるんだから、使ったナイフはきちんと拭いてよ。」と言った。本人に悪気は全くない。が、その時のラリーの顔が、「コラー! わしかて、ディナーに肉食べたいところを文句言わずに合わせるんや。ナイフなんて細かいことまで言うなー!」と本当に言いたそうで、同情しつつもついおかしくなってしまった。これも旅のスパイスである。

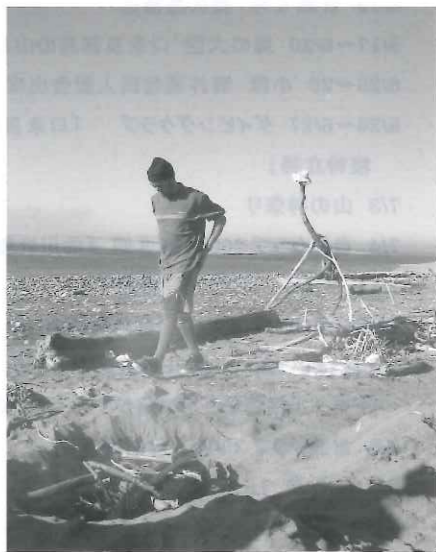
そんな中でガイドは、参加者達をさりげなくコントロールし、悪天候の中、それでも安全に楽しめるようルート変更したりと、実に紳士にツアーを展開していくのだ。そして、風呂には入らないがNZの自然にはどっぷり入りきっている幸福感、それを共有してきた仲間達との一体感が盛り上がる10日後にツアーは終了する。実によくできている。祭りは気分が最高潮の時に終わるのがいい。この達成感がリピーターを呼ぶのであろう。「EASTERN EPIC」では私を除く7人中3人が、「WESTCOAST WILDERNESS」では10人中4人が、リピーターもしくは1つのツアーに参加して続けて、別ツアーに参加するのを決めた人達であった。この恐るべしリピーター率を見て、ツアー満足度の高さを伺い知ることができる。

ただ、一つだけ私がYNACのエコツアーと違っていると感じたことがある。それが、「インタープリテーション(自然解説)の重要性」であった。今回、ツアー中に自然解説はあった。だがそれらの話が連続性を持ち、NZの多様性にまで発展していくというものではなかった。参加させて頂いたツアーを担当したガイド達は、知識はある。だが、彼らにとって、インタープリテーションはツアーに深みをもたせるエンターテインメントではなかったようだ。良質な自然解説によりその土地を知った気分になる、さらにそれが自らの自然への気づきに繋がることを、参加者にとって大きなヨロコビになり得ることを知っている私としては、もったいないなあと感じた。

とは言え、そんな理屈抜きにNZの自然はやはり素晴らしい。本当に良いモノは、ウダウダとした細かな説明などはいらぬ。これも事実

だ。今回の滞在では、私の研修を快く引き受けて下さったハイキング・ニュージーランド社のおかげで、ナンキョクブナの森を始め、氷河が作ったU字型の大きな谷とそこに広がる高山植物のお花畑、森を飲み込む苔の森、南十字星の星空と焚き火…とNZを思い存分満喫させてもらった。

トランピング最終日、氷河から流れてきた川のそばの大岩で寝転がり、目の前に広がる森とその奥に聳え立つ雪山を見ながら、この国の自然が持つ実力をひしひしと感じた。と、同時に屋久島を想った。自分が気持ちいいと感じる土地で、その土地の話ができる、この島の実力をどうだ!と見せることができる…。エコツアーガイドって幸せな仕事だ。



酒と焚き火に囲境はないとオブジェのキリンが申しております。



## Calendar · 2004

- 1/5 YNAC 仕事始め  
1/9~1/12 風の天空 '屋久島の森を往く'  
1/18 自然クラブ 2003 第 10 回「破沙岳登山」  
1/25 自然クラブ海部 新年会  
1/30~3/3 鷲尾 NZ自主研修  
2/1 小原 環境省「自然に親しむ集い・鈴川の滝」講師  
2/6 山の神祭り  
2/15 自然クラブ 2003 第 11 回「西部の森を歩く」  
2/20 自然クラブ海部「永田~大川の滝・河口」  
2/25~2/27 市川 知床にて講演。  
世界遺産登録より 10 年が過ぎた屋久島の実情を語りました。  
2/25~2/28 松本 和歌山・熊野古道にてインタープリター講習  
2/28 小原 日本トイレ協会にて縄文杉ルートの水場における水  
質調査(2001~2003)について発表。  
3/21 小原 屋久島リアルウェブ「最新登山道情報」発信開始。  
4/1 YNAC 第 4 期研修生(佐藤・櫻村・長谷川) 研修開始  
4/2~4/4 岡田 風の天空 '対馬の森を往く' 講師  
4/17 自然クラブ海部「一湊~吉田」  
5/9 自然クラブ 2004 第 1 回「ロープワーク講習会」  
5/11 自然クラブ海部「麦生~トローキの滝~尾之間」  
5/13~16 風の天空 '屋久島原生林縦走'  
5/22~5/31 市川 沿海州 調査  
5/23 ダイビングクラブ「一湊・元浦」  
5/25~5/28 松本 国交省 自然ガイド調査アドバイザー会議  
6/4 松本 熊本・阿蘇 半島ツーリズム大学エコツアーガイド講師  
6/6 自然クラブ 2004 第 2 回「石塚山登山」  
6/10 台風 4 号 屋久島大接近。大量の雨をもたらしたこの台風  
の影響で、屋久島のような林道は土砂崩れを引き起こし、白谷  
雲水峡官之浦線は約 1ヶ月通行止め、屋久島公園安房線~荒  
川登山口は 9 月現在も通行規制がかかっている。  
6/15 自然クラブ海部「吉田~四瀬~永田」  
6/19 台風 6 号 屋久島接近  
6/17~6/20 風の天空「口永良部島の山と海」台風接近で中止。  
6/25~29 小原 海外遊行人会総会出席。台高・大峰で沢登り。  
6/26~6/27 ダイビングクラブ「口永良部島 城鼻&後境 +  
寝待立神」  
7/3 山の神祭り  
7/4 自然クラブ 2004 第 3 回「鈴川沢登り」雨天中止  
7/11 ダイビングクラブ「香附子」  
7/16~7/19 風の天空「屋久島の海と川」「海と川から見る屋  
久島」という新コンセプトのもと、アカテガニやウミガメの産卵、タ  
イドボール観察など水の繋がりに屋久島を探ってみました。  
8/8 自然クラブ 2004「鈴川沢登り」  
8/29 台風 16 号屋久島大接近  
9/5 松本 知床リレーフォーラム パネリストとして出席  
9/6 台風 18 号屋久島接近

## Contents

巻頭言「職場体験を受け入れて」	小原比呂志	1
マウンテンバイク 安房コース	藤村早苗	2
屋久島・有象無象	岡田愛 高橋宏美	4
YNAC研修生つれづれエッセイ 佐藤崇之 櫻村精一	長谷川リエ	6
屋久島産スズメダイ科の魚類 Part.1	松本毅	8
ウスリータイガを往く	市川聡	10
行ってきました、見ってきました、NZ!	鷲尾紀子	13

## Library

・山と溪谷社「屋久島ブック」2004/2005 (小原・鷲尾)

巻頭ヤクスギランド~太忠岳特集を担当しました。大好評  
発売中。

## 編集後記

◆やっぱり海の世界は面白いなあと思直しました。もっと海に  
潜っていきたくと思います。(M.T.)

◆ロシアに行って英語以外の外国語に興味が増えました。少しで  
もわかると、言葉って楽しいですね。(I.S.)

◆『岳人』誌の沢ルート選集「新日本百名谷」に屋久島から4本も  
入りました。屋久島をディスカバーしようかな。(O.H.)

◆研修生が3人も入ってにぎやかなYNAC。若かりし4年前を思  
い出します。初心に帰って、ついでに若返らないかな…(O.A.)

◆今年、ポートダイビングガイドデビューした私です。すごい楽しい  
ですよ!ビーチポイントとはまた違った世界をあなたも是非覗いて  
見ませんか?(T.H.)

◆屋久島の四季をふんでいくのが、毎日のヨロコビです。  
でもって俳句をはじめました。(W.N.)

『夏の海 黒潮走り 雲を呼ぶ 飛骨(俳号)』

◆屋久島は星もきれい。夜の湯泊温泉にはまっています。(S.T.)

◆毎日ごはんがおいしくて幸せです。ケガや故障のないように頑  
張ります。(K.S.)

◆長いと思っていた研修期間も、もう半分。早すぎる…待つてく  
れ…。(H.R.)

◆今年は台風の当たり年。屋久島には6月より大きい台風が4  
つもやってきました。改めて台風の脅威を感じるのですが、普段  
から台風と生活を共にしている島の人たちの強さも同時に感じて  
います。私もまだまだ未熟と感じる今日この頃です。(F.S.)

## YNAC 通信 NO.19

発行日:2004年9月1日

発行:(有)屋久島野外活動総合センター

住所:〒891-4205

鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦 368-21

TEL 0997-42-0944 FAX 0997-42-0945

E-mail: forest@ynac.com